

SGRAレポート

No.0010

第6回SGRAフォーラム

日本とイスラーム

～ 文明間の対話のために ～



*Sekiguchi Global
Research Association*

SGRA

関口グローバル研究会

2001年12月21日(金)午後5時半から8時まで、東京代々木上原のイスラーム教モスク、東京ジャーミィにて、第6回SGRAフォーラム「日本とイスラーム：文明間の対話のために」が開催されました。参加者は、まず、SGRA研究員で東京ジャーミィ副代表のセリム・ギュレチさんの案内で、礼拝堂を含む施設の見学をしました。その後、1階の多目的ホールにて、東京ジャーミィ代表のジェミル・アヤズ様とSGRAを代表して今西から挨拶があり、次に、ギュレチ氏より、9月11日のテロ事件後、たくさんの報道人がインタビューにやってきたが、イスラームについて極めて限定的な知識しかもっていなかった。そこで「日本人の皆さんが人間を磨くために考えることは、ほぼイスラームの基本的な概念をなしている」と申し上げた、という短いコメントが披露されました。

講演会では、日本のイスラーム学の権威、東京大学名誉教授の板垣雄三先生のお話を伺いました。先生は、まず、日本はイスラームを遠ざけて見ようとし、イスラーム世界は日本に親近感を抱いているが、何故そうなったのかという問題を提起されました。イスラームは、本来、宗教や文化の異なる多様な人々が共生し取引する「都市」を生きる生き方を教えてきた。このイスラームの多元主義的普遍主義に対して、欧米は、欧米対イスラームの対立にこだわり、イスラームを敵と決め付ける文明衝突論の伝統を抱えてきた。イスラーム世界の人々にとっては、欧米諸国に双肩する日本は憧れでもあり親しみも感じている。

一方、欧米のメガネを借りた日本人のイスラーム観は、しばしばこの思いを裏切る。正倉院御物の中にも見出されるように、日本とイスラーム世界との繋がりは非常に古い。また、現在の日本人は、日本の経済的繁栄の土台である化石燃料が、あたかも自動的にもたらされたもののように勘違いしている。日本社会は、イスラーム世界の日本に対する好意的な心情が、日本にとってかけがえのない資産だということに気づかなければならない。

イスラーム文明は、近代欧米文明の源泉である。日本の知識人がイスラームへの無知を口にするのは、実はよく知っていると思っている欧米への無知を告白しているにすぎない。世界人類を巻き込む現在の危機において、日本は欧米を通したイスラーム観から離脱し、日本独自の役割を演じなければならない。「多元的な都市」を生きるイスラーム文明本来のメッセージを評価して、イスラーム世界と文明的協力を進めていかなければならない、と訴えられました。

その後、限られた時間でしたが、板垣先生とセリムさんのおふたりに対して、質疑応答が行われました。そして、トルコ料理の懇親会においても、おふたりの講師の先生は、参加者の熱心な質問に答えていらっしゃいました。雪まじりの雨が降る生憎の天気でしたが、トルコのお茶サーラップに始まったSGRAフォーラムに参加した76名の参加者は、温かくて明るいモスクの中で、イスラームの夕べを楽しみました。

(文責 今西)

第6回 SGRA フォーラム

日本とイスラーム

文明間の対話のために

日時：2001年12月21日（金）17:30～20:00

会場：東京ジャーミイ1階多目的ホール

プログラム

挨拶：東京ジャーミイ代表 ジェミル・アヤズ

挨拶：東京ジャーミイ副代表 セリム・ユジェル・ギュレチ

ゲスト講演：日本とイスラーム - 文明間の対話のために -

東京大学名誉教授 板垣雄三

フロアーとの質疑応答

講師略歴



東京ジャーミイトルコ文化センター

ジェミル・アヤズ代表

板垣先生ならびにお集まりの皆様、このような有意義な機会を持ってこの東京ジャーミイトルコ文化センターにお出でいただきありがとうございます。

私はご挨拶、そして日本に来てから感じていることを述べたいと思います。私は、ここに来るまで世界の色々な国に赴任してきました。日本に勤務することになりまして、1年ともう少し経っているのですが、日本の印象は、私がいた世界のほかの色々な国に比べて大変違ってしています。それは、今まで、他の国に勤務していた時には、礼拝堂に来ている人たちは、参詣の人たちが多かったのですが、なぜか日本は逆で、礼拝に来る人よりは、見学にいらっしゃる方々のほうが多い。(笑い)

しかしこれが良い機会で、私も日本の文化を知ることが出来ますし、たくさんの仲間を増やしていくことができ、非常に楽しい日々を送っています。

この集まりを機会に、友達を作り、友達の輪を広げていきたいと思っています。

本日はどうも有り難うございました。





セリム・ユジェル・ギュレチ副代表

9.11事件が起きて、次の日の朝ここに来た時には、この建物（このあたりでは比較的大きいのですが）の周りは報道人で一杯になっていて、駐車場に車を置き、こちらの方に回る間に、たくさんの人に名前を聞かれ、マイクが向けられて「どうなりますか」「事件がおきてどう思いますか」という質問を受けました。みんなに対応する資料がないので、1日に10～15人の報道人を迎え、ほぼ2週間、こちらに見えた方と話をしましたが、「日本の報道の方々は、何かステレオタイプのイスラーム教徒がある」と思い込んでしまっていて、また、ステレオタイプのイスラームがあると勘違いしているところがある」と感じました。それと同時に、イスラームというものは一体どういうものであるかという事は全然把握しないで、すぐに、事件に関わっている、或いは、その疑いが掛けられている人は「イスラーム教徒」であったということだけを取りあげて、「やはりそうだったんだ」という論調で、今回の事件、その前のエジプトの遺跡の観光客襲撃事件、それらすべてを宗教学的に取り扱ってしまう。すべての責任をイスラームの方にというような流れがありまして、非常に不愉快に思いました。それで、私は訪問の報道人に対して、「イスラームはどういうものですか、

イスラームの基本的な考え方、イスラームについて思っていることがあったら2～3言ってください」とお願いしました。殆どの新聞記者にそういう質問をしましたが、大体の方がイスラーム教に関して仰ったことは「1日何回か礼拝するだろう、それから豚肉は駄目だ、それから御酒もだめだ」という3つぐらいしかありませんでした。そこで、私は次のように申し上げました。イスラームはそれだけではなくて、人間が、或いは日本人が日本人として、「良い人間とはどういうものであるか」と言う質問に対して、いくつかの答えがかえってくると思いますが、でも、「人間というものをより良く磨く、また、より良い人間を教育する過程で、一般の、ごく一般の、日本人の方々が言ってくれることは、ほぼイスラームの基本的な概念をなしている」と。

ここで、マイクを板垣先生にお渡ししたいと思います。その中味については板垣先生が十分ご説明してくださると思います。どうもありがとうございます。

日本とイスラーム

文明間の対話のために

東京大学名誉教授
板垣雄三

板垣でございます。皆様こんばんは。今日は、関口グローバル研究会にお招き頂き、お話をする機会を与えられまして本当にありがとうございます。そしてまた、この東京ジャーミイという場で、イスラームについて私の考えておりますこととお話させていただくということも、これまた光栄なことであると考えております。

私は、今日、題としては『日本とイスラーム：文明間の対話のために』という題を掲げさせていただきましたが、今、セリムさんのお話にもありましたように、9月11日の事件後、ことに、日本の社会の中でイスラームに対する関心が一挙に高まったわけです。しかし、その関心の持ち方には、非常に問題があると感じております。日本では、イスラームは、先ほどの話にもありましたように、戒律厳しい宗教、個というものを抑圧する集団主義あるいは全体主義の、そういう宗教なのではないかというイメージが先行しています。とくに、女性にはことさら厳しく、女性をもっぱら家の中に閉じ込め、外ではベール着用を強制して、一人前の人間とは扱わない、男性優位の宗教ではないかというイメージもあります。さらに、イスラームはテロリズムの宗教ではないか、イスラーム教徒はテロに走る傾向がある人たちではないか、という見方も、たえず付きまとうようなことになってしまっているわけです。

私は、イスラーム教徒の色々な社会に接し、ともに生活もし、観察する機会もたくさん持ってまいりましたが、世界の宗教を見渡してみても、恐らく人間

一人一人が一番自由に振る舞うことができ、制約や戒律の少ない宗教は、イスラームではないかと思っています。宗教は、所詮は、一人一人の心の問題であります。イスラーム教徒は、他の人に「ああしなさい、こうしなさい」といったことを、全く言わない。隣の人や他の人の魂の問題を心配してあげるといふ、いわばお節介をやかないのです。結局一人一人の問題だという立場、その個人主義が徹底している、そういう宗教だと感じております。



先ほど女性の地位に触れましたが、預言者ムハンマドがマディーナ（メディナ、現在サウジアラビアの都市）を中心にイスラームの国を築いたとき、どんな新しい社会が生まれたのかということをお話ししましょう。周りと比べて、この新しいイスラーム教徒の社会で、一番目立つことは、女性の遺産相続権を法的に確立したことです。この場合あの場合と

様々なケースに応じて、女性の遺産相続権をしっかりと規定しました。また、女性が法廷や社会生活の場で証人として立つこともできるようになった。このような社会の出現こそ、イスラームの成立だったのです。西暦紀元7世紀初め、日本で言えば聖徳太子の時代に、イスラームは世界でもっとも先進的に女性の遺産相続や証言の権利を打ち立てた。このことからすると、イスラームが女性に抑圧的な宗教だという話をそのまま信じていいのでしょうか。



この例からしても、私達が抱いているイスラーム像には、よく考えてみると、実はおかしいことがいろいろあると思います。日本では、イスラームというと、それは砂漠の遊牧民の宗教だろうといった、そんなイメージがあります。「目には目を、歯には歯を」という式で、「私達の常識を越えた」「とても私達の物差しでは計れない」・・・そんな異質な人々の宗教と突き放して考えようとする傾向があるのですが、私は、これはまるきり、100パーセント間違っていると考えます。

もしイスラームを特徴付ける目印を探すならば、遊牧とか砂漠ではなくて、むしろ「都市」なのです。人間をいかに都市化するか、いかに都市人間をつくり出していくかがイスラームの関心事であり、イスラームは人間がいかに「都市」を生きるかを教えるものと見られるのです。都市とは、文化の異なる多様な人々が集まってきて、出会い、住み合わせ、取引をする場です。異質の人々が混じり合って共生す

る、そういう「都市」的な場をいかに創り、そこでいかに正しく生きるかという課題が、イスラームの教えの中心にある。私は脇から研究して、そういう風に考えるようになっております。

今日、皆様は、東京ジャーミイを訪れ、この建物・施設を見学し、そしていろいろな瞬間に、これは凄い、一つの立派な文明をあらわすものだ、私達の文明とは違うけれども、まさしく「文明」がここにあると感じられたのではないかと思います。まさしく都市文明を代表するイスラームに対して、おそらく私達は、これまで極端に間違った読み取り方をし、歪んだイメージを作ってしまった。私は、私たち自身を変えて行きつつイスラーム文明と対話しなければいけないのではないかと、思っております。

プログラムにも書いておきましたが、日本からイスラームを見る時には、絶えず私達とは違う、私達から遠い、私達とは関係がない、というように距離が強調されるのです。疎遠だという見方をする癖がついてしまっている。ところがイスラーム世界の人々は、日本を非常に身近な存在、親しい存在と感じている。日本に対する親近感がすごいのです。文字通りの「片思い」です。

「イスラーム世界」という言葉を使いましたけれども、現在ではイスラーム世界とはグローバル世界そのもので、地球上どこもイスラーム世界になってしまったという、そんな感じも致します。ヨーロッパにもアメリカにもイスラーム教徒はたくさんいます。9・11のテロ事件に直面して、アメリカはテロリストに対する戦争というものを始めたわけですが、アメリカとテロリズムとの戦いをどこかで取り違える人がいて、アメリカがイスラーム世界を相手に戦いを挑んでいるような、そんなイメージを抱いたりする人がいる。そういう人には、アメリカはイスラーム世界の外側であって、イスラームと対峙し対決するという感じかも知れませんが、アメリカ社会は700万人ものイスラーム教徒を抱え込んでいます。湾岸戦争の後、サウジアラビアやクウェートからのアメリカ帰還兵のかかなりの数の人が、イスラーム教徒となって帰国したといわれます。ア

アメリカの黒人の間では、イスラーム教徒はどんどん増えていますが、白人の間でもイスラームに改宗する人たちが出てきている。ですから、アメリカもイスラーム世界の一部分なのです。もっとも9月11日以降は、そういう人々も身に危険を感じるという、そういう社会にアメリカはなっている。アメリカ民主主義の危機と言わなければなりません。

さて、イスラーム世界の人々が日本人に親近感を感じているということに、話を戻しましょう。日本国家が行った侵略戦争や植民地支配のために、近隣のアジア諸国の人々は、日本人の過去の暴虐や圧制の苦い記憶をなかなか拭うことができません。日本が近隣アジア諸国と理解を分かち合えないでいるのとつり合う形で、日本人はイスラーム世界の人々が日本に対して抱き続けてきた好意に気付かないという、二重の深刻なすれ違いがあるのです。

たとえば、20世紀の初め、日露戦争で日本がロシアに勝利したことは、イスラーム世界の人々に強烈な印象を与えたようで、日本を自分たちの手本にしたいという考え方が様々な形で表現されました。日本と日本人を讃える詩。あるいはヨーロッパの制覇をうち破る東洋のリーダーとしての日本に希望を託す評論。日本への関心は、隷属と悲慘から抜け出す夢を非ヨーロッパ世界に与えた日本人に対する賛嘆と興味だったのです。

明治から今日に至るまで、イスラーム世界から日本にやってきた人々は、様々なメモワールを、日本印象記、日本旅行記として残しました。1930年代末にこの東京ジャーミイが生まれたときイマーム（リーダー）になられ、1944年敗戦直前の日本で亡くなったタタール人アブドルレシト・イブラヒムも、その一人です。彼が日露戦争の4年後に日本を訪れて書いた旅行記は、『ジャボンヤ』（第三書館）という邦訳があります。日本にやってきたイスラーム教徒の印象記が一様に強調するのは、日本人はイスラーム教徒でないのに、日本人の心や生き方はイスラームに通じるという点です。そのようにして、日本文化や日本人の精神生活はイスラームに近接した存在として観察されてきたのでした。

この問題については後で、もう一度考え直してみたいところですが、とにかく、それとは対照的に、日本からイスラームを見る場合は、相手を異質のものとして遠ざけよう遠ざけようという気持ちが働くのです。イスラーム世界が日本を見るときには、同質化しようとする。自分とのつながりを求め、共通性を見出す。そういう特徴的な傾向が認められます。どうしてそういう違いが生まれてきたのかということ、私なりに検討してみたい。これにしばらくお付き合い願いたいと存じます。

図1



図1は30年以上前に私が作った「文明戦略マップ」というものです。日本から考えて、世界の諸文明のあり方、日本の文明の位置、そういうことを考える上で一つの手がかりにしてみたい。その場合に、私はたまたま中東とかイスラームに関心を持っておりましたので、日本と中東との関係、日本とイスラームとの関係ということも考える図になっております。まず、ユーラシアサークル（サークルは「世界」と言い換えてもいいですが、歴史的・伝統的にコミュニケーションが密な場を一塊りに括って考えるものです）。次にインド洋サークル。三つ目が地中海・アフリカサークル。この三つは歴史的世界と考えてもいいのですが、それらが全部重なり合っている、三つ巴になっている部分が中東だと私は考えます。この図を作ってから三十数年、この考えは全く変わっておりません。言ってみれば、中東には、ユーラシアも、インド洋も、地中海・アフリカも、全部揃っ

ている。つまり、中東は三重に重なり合った歴史的世界の権化です。二重に重なり合ったところはクローバーの葉っぱのようになっており(「三つ葉のクローバー」と私は呼んでいます)これがいわば中東の拡張部分と考えられます。これを加えますと、真ん中の部分を軸に三方に広がる形状のクローバーが、イスラーム世界の歴史的な核となった地域を表します。三つ巴の歴史的世界の後ろ側に、太平洋や大西洋という間隔を置いて、いわば「ウラ世界」としてのアメリカ大陸があります。

図2



図2のように、このアメリカ大陸では、かつてモンゴロイドの人たちの一部が(私達もモンゴロイドだと思います)今のベーリング海峡・アラスカの辺りを渡って行き、アメリカ大陸の先住民になりました。インディオとかインディアンとか呼ばれる人たちです。のちにはイベリア半島からたくさんの人たちがアメリカ大陸に渡りました。ヨーロッパからも行った。そしてアフリカから非常にたくさんの人たちが、奴隷にされてですけれども、移って行った。そして最近、太平洋考古学の成果として、太平洋を超えたオセアニアの人間活動の痕跡が発見され、見直されるようになっていきます。

こういう風にして考えていくと、裏側の世界のアメリカ大陸というのは、手前に見える三つ巴の世界を全部持っている世界であるとも言えるわけです。すでに先ほど考えていただいたように、中東という

場所は、否応なく手前の三つ巴の世界の中心にある。人と物と情報がここで交錯し集散する。いってみれば、中東は最初から生得的・運命的に世界の中心性を担わざるを得ない、そういう場所として位置づけられていたのです。ところが他方、アメリカ大陸というのは、前景としてあった歴史的世界のすべてを遅れて抱え込むにいたる過程を経て、もう一つの中心性を獲得的に、つまり後天的に持つようになった。したがって、この文明戦略マップの上では、中東とアメリカ大陸とは、いろいろな意味で興味深い比較対照ができるのです。

アメリカ大陸といえば、アメリカ合衆国だけでなく、中南米やメキシコ・カナダも含みます。アメリカ合衆国でさえ、決して英語の世界とは片づけられず、スペイン語の世界でもあれば、中国語の世界でもあり、ベトナム語やアラビア語やベルシャ語の世界でもあるのです。そういうアメリカ大陸は、もともと中心性を担った中東という地域と、いろいろな意味で比較可能です。中東の人はアメリカに行って水を得た魚のように活躍できるし、アメリカ大陸の人々は中東との関係に入っていくやすいと見られる。そういう意味で、両者は類似した文明的背景を持っていると考えることができます。

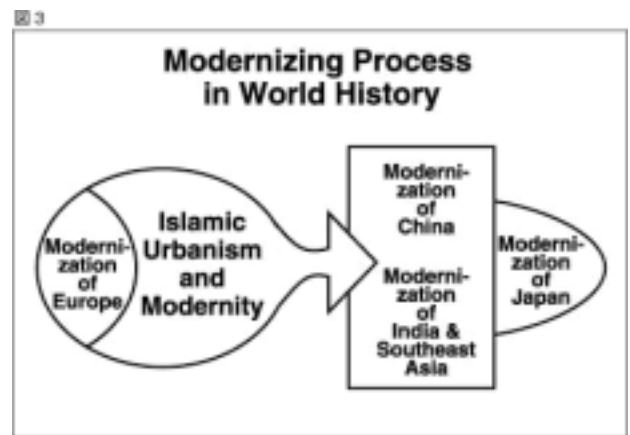
ところで、図1のように、日本と西欧とは対称的な位置にあることに注意してください。日本は、ユーラシアサークルとインド洋サークルの外側の交点。そして西欧はユーラシアサークルと地中海アフリカサークルの外側の交点。日本人の頭の中では、西欧は、実際より過大に膨らんだイメージで考えられています。他方、日本列島は日本人の思い込みを越えた広がりを持っており、それは日本の文明にとって重要な意味があります。日本と西欧とは、非常にシンメトリカルな二つの位置を占めていて、意味ある比較対照が可能な、かつ大体同程度の規模をもつ二要素と考えることができます。

さて、日本と西欧とは対称的だと言いましたが、いろんな意味で似通っております。というのは、世界全体の、すなわち人類社会の発展コースの中で、西欧と日本とが、特異的に、例外的な社会発展や文化の質というものを呈することになった。日本人は

しばしば「日本はアジアの一国だ」などと気楽なことを言いますが、今日の私の話からしますと、そんなに安直にはアジアだといえない。このことはまた後で申しますが、たとえば、長子相続制ですね、長男が家を継ぐ、そういう仕組みができてしまった社会は西欧と日本のそれです。それ以外のところはそんな風になっていません。概して言えば、子供たちみんなで財産を分け合うという、そういう社会です。それから封建制。西欧の封建制と日本の封建制とをそのまま同列には議論できませんが、しかし「封建制」も世界のいたるところにあるわけではない。そして何よりも、農村から資本主義が生まれてくる。これもこの二つの地域の特徴です。そして更にはその資本主義が変わった資本主義なのです。といっても、一般に社会科学は、こういう変わった現れ方をした資本主義こそが、典型たるべきお手本の資本主義だと決めてかかるところに成り立っているのではありませんが。変わった独特の資本主義と申しましたが、これを短く言ってしましますと、極度の軍事化と結合した大量生産型・プランテーション型の資本主義ということができるでしょう。原料産出地と市場とを一挙に抑えこみ統制しようとするようなミリタリゼーションが随伴している。軍事力に物を言わせるといった感じで、武力と結びついた資本主義といってもいいのではないかと思います。このような軍事化された資本主義が西欧と日本とで生まれた。さて、この問題をちょっと考えてみたいわけです。

西欧と日本が、不思議な共通性でつながっているという場合、両者とイスラーム世界との関係を考える上で、私は図3を作ってみました。最初に申しましたように、イスラーム文明の特質は何かといえば、都市人間を作り出す、人間の内面を都市化することです。どこでどんな暮らしをしていようが、つまり山奥に暮らしていても、砂漠で遊牧生活をしていても、海上をダウ船で動き回っていても、「心は都会」なのです。「都市」を生きている。さっきからお話しているように、都市を生きるというのは、異質な文明同士が出会い、対話の場をたゆまず拡げていく、そして多様な社会・地域の間のネットワーク

を作り出していくということです。そしてそこに近代性が生み出される。



皆様、先ほどから私の話を聞いていて、多分、事ごとに抵抗を感じるとか、納得するにはどうも何かおかしいと感じていませんか。常識に八つ当たりの挑戦をしていると思ってもいるでしょう。私は、西暦7世紀にイスラーム文明が成立した時から、人類の歴史は「近代」を迎えたと考えています。

よく、ウエスタン・インパクトとかいって、19世紀あたりにヨーロッパの影響がアジアに及び、そこでアジアの近代化が始まったのだと語る歴史観があります。全て近代的なモノ・コトは西欧から始まったという。そういう考えを私達は、生れ落ちたときからずうっと刷り込まれ、徹底的にそういう教育を受けてきた。私は今日、皆様に、そういう自分の頭の中に染み付いた約束事のヨーロッパ中心主義をちょっとずらしてみたら、どんな風に世界が変わって見えるかということを、ぜひ実験してみたいと思っています。

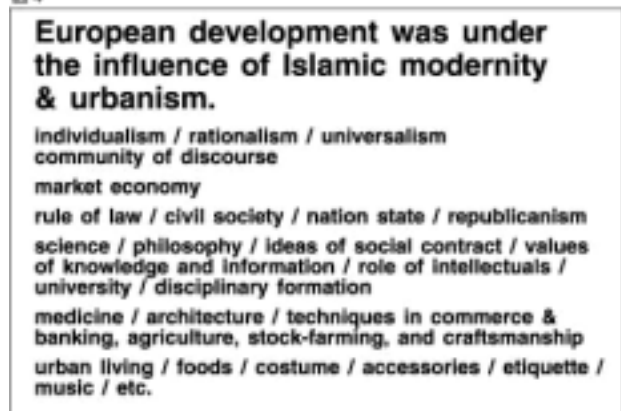
さて、図3を見ると、イスラームのアーバニズム+モダニティの「鯨」がいます。描いてみたら鯨みたい形になったので、そう言い始めたのですが、この鯨がちょっと口をあけたら、そこにヨーロッパが見えるという感じがピッタリだと思うのです。ヨーロッパ人はしばしば世界を二つに分けて考える。ヨーロッパとアジア、西洋と東洋という二項対立の二分法です。「二つの世界論」と私は言っていますが、

二つの世界は、価値の上でも、ものすごく違うものだと思われてきた。ヨーロッパ人は、イスラームという鏡に絶えず自分を映してみ、イスラームはいかに駄目か、いかに酷いものかと考えながら、逆に、鏡に映る自分の姿はなんと美しいことか、と惚れ惚れとする…。そんな自己愛を梃子にして、主観的にイスラームを敵視し軽蔑しながら、自分を成長させた。実は心の中では、イスラームに追いつけ追い越せと、必死になってイスラームの都市文明からいろいろと学習したのですけれども、取れるものは何でもとってきたという感じなのです。とにかく、世界には大きな境目があるとして、自分たちと他者、自分たちヨーロッパとイスラームに代表される東洋とに二分して考える癖がヨーロッパにあるのです。最近になって「オリエンタリズム」という言葉で、ヨーロッパ人の歪んだイスラーム観、東洋観に対する反省が、やっと、欧米の人々の間でも開始されるようになりました。しかし、歴史的・伝統的な「二つの世界」論の万里の長城は今なお強固で、こちら側は発展的・合理的・民主主義的な世界、あちら側は停滞的・非合理的・専制的な世界と二分して、「他者」を貶めるアジア蔑視の見方がこびりついている。こちらには光り輝く近代の世界がある、新しい文明はここで生まれて来たのだ、という欧米中心の見方です。しかし考えてみれば、ヨーロッパとイスラーム世界は地続きです。どの角度から眺めても、ヨーロッパは学ぶことばかりだった。それで、イスラームの都市性と近代性がヨーロッパ的に展開したものこそヨーロッパの近代だと、私は考えています。

ところでこのイスラームの都市性と近代性の働きが東のほうにもネットワークを広げていった。身近なところで考えますと、中国社会の近代化が10世紀ころから非常に顕著にあらわれてくる。そしてインドや東南アジアの近代化も同じく10世紀ころから始まる。そしてこのようなアジア諸社会の近代化がインパクトとなって日本にも及んできて、それと交感するようにして、日本の近代化が16世紀からはっきりと開始されるということではないか、と私は考えています。

字が細かいですが、図4は、イスラームから切り離してヨーロッパの発展を考えることはできないということを示そうとしたものです。ヨーロッパがイスラームから受け取ったものは何かというと、個人主義・合理主義・普遍主義です。これらはヨーロッパ産であって、イスラームに個人主義なんてあるのか、イスラームは合理主義と正反対なのでは、などと、皆様、心の中で抵抗しておられるのではないのでしょうか。これまでの研究者人生を通じて、私は、ずっとこういう議論がいかに成り立つか、いかに証明できるかということを考えてきたので、皆様の心の中にとげとげした抵抗感があるのと違って、私のほうは大変楽しい気分でお話しているわけです。是非これを聞いておいて頂きたい。

図4



「市場経済」という話は、ソ連が崩壊した後、急にはやり出しましたがけれども、本来マーケット・エコノミーの考え方は、むしろイスラームに密着した考え方です。「法の支配」もあらためて注目される言葉ですね。「市民社会（シビル・ソサイエティー）」という言葉は、最近、NGOなどの関連で用いられますが、これも、元来、どこから来たんだといえればイスラームです。「国民国家（ネーション・ステート）」という概念は、最近評判はあまりよくないけれども、ここでも7世紀に成立したウンマ・イスラミーヤこそ国民国家の原型だったのです。ところが、17世紀あたりになって出現したヨーロッパ中心の国民国家体系やら国際社会やらが本家を詐称して、世界に広がった。その局面だけをとって、これこそ

世界システムだという議論をしているのが、現在の社会科学の悲しい現実です。本当の土台を見ていない。イスラーム世界を切り捨てて、ヨーロッパから近代が始まったという見方に固執するから、土台を見落としてしまった。

「共和主義」あるいは「共和制」についても、同様です。イスラームには、もともと王様というものがないかった。むしろリーダーを選挙で選ぶというのがイスラームのやり方だったのです。確かに、王権や王朝は現れましたが、それらも統治の正統性は人民の合意に基づくという建て前に縛られ続けたのです。科学、哲学、社会契約の観念、知識や情報の価値、知識人の役割、大学、などなど。ここに挙げた項目を一つ一つ、イスラームに結びつけて、皆様に丁寧に説明するとなると、関口グローバル研究会を1年か2年、私が独占することになりかねません。

たとえば「科学（サイエンス）」。現在、IT関連でよく用いられる「アルゴリズム」という言葉がありますが、これはそもそも何かということから始まるような問題です。たとえば「大学」。学問分類や大学という組織でも、ヨーロッパの大学は、イスラームのマドラサ（高等教育の学院）をまねることによって成立してきたのです。ゲーテのファウスト博士の独白に出てくるような法学・医学・哲学・神学といった学問の分類は、イスラーム教徒の学問のシステムを、ヨーロッパ人が必死になって輸入したものなのです。さらに、都市的な暮らし方とか食物、衣装、アクセサリ、エチケット、そして音楽など、いろいろ挙げました。お世話になったのは実はよく分かっているが、十分に分かっているから何も云わないという式で、逆に何もかも全部ヨーロッパ発で始まったという話にすり替えてしまった。ヨーロッパの楽器の由来や音楽理論をとってみるだけでも、考えてみれば、ヨーロッパをイスラーム世界から切り離すわけにいかないのです。

図5-1, 2, 3では、アジアの近代化について考えを深めてみましょう。中国の歴史の中で、都市空間の構造や都市生活のあり方に関しては、唐宋あたりから変化が起こり、宋・元という時代に大きく変

貌しました。中国における商業都市や庶民文化のめざましい展開は、イスラーム文明との接触を無視しては説明できません。市場の構造でも、取引や決済のやり方でも、中国はイスラーム世界のネットワークに連結したのです。イブン・バトゥータのモロッコから中国までの旅は、そんな遠隔地の間でも為替の決済に支障がない。これは、各地のイスラーム法学者のつてを頼って安全に移動できるという広大なネットワーク空間の存在を抜きには考えられないことです。華南の開発では、中国にやってきたアラブやイラン人の商人たちをはじめ、イスラーム教徒の役割が絶大だったと見られます。世界的貿易港、泉州はザイトゥーンというアラビア語名（オリーブの意）まで持っていました。

図5-1

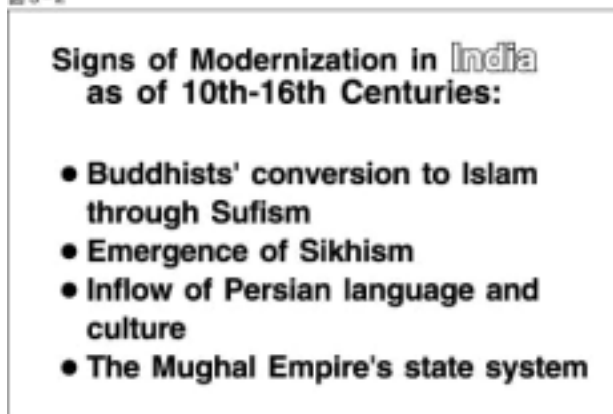


宋学とか朱子学と呼ばれ、陽明学につながる新儒教の体系化の潮流では、「天は理なり」的立場がどのようにして生まれてきたのかが問題です。これまで、それはイスラームへの観点を排除する中国思想史の文脈でばかり語られてきました。しかし、イスラーム思想とのつながりに目を向ける必要があり、思想の面でもイスラーム的ネットワーキングが中国に広がったことを見落とすべきではありません。広い意味での中国のイスラーム化現象の一面なのではないでしょうか。宗教としてイスラームを受容しなくても、イスラームのネットワークへの参与こそイスラーム化なのです。中国社会にイスラーム教徒の集団が生まれただけでなく、儒教に生じた変化もイス

ラーム化と関係があると言えるのではないでしょう
か。

日本でも多くの研究者の関心を集めている 16 世紀
明代の反逆の思想家、李卓吾（李贄）は、中国のイ
スラーム教徒の家族から出た学者として知られてい
ます。ところが彼は、儒教や仏教の思想の次元だけ
で、中国人思想家として研究されている。イスラーム
は中国本来のものではないから、イスラームにつ
いては無視することにする、ということでしょうか。
こういう視野狭窄は、ヨーロッパ研究がイスラーム
文明との関係を意図的に見ないことにしてきたのと
同様に、重大な欠陥だと言わなければなりません。

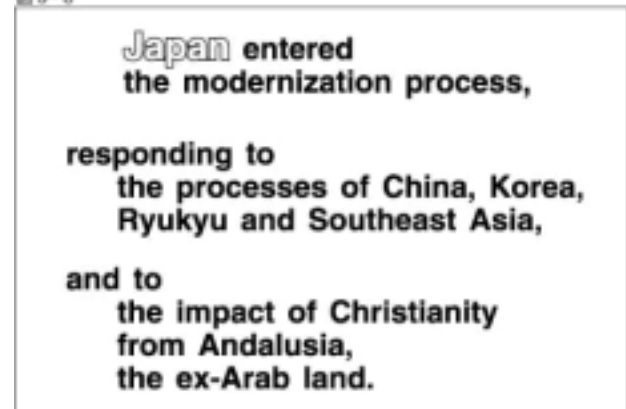
図 5-2



インド研究の場合も、同様の問題があります。例
えば、インドや中央アジアの仏教徒が消滅してしま
った理由や背景とは何か。20 世紀インドでは仏教は
あらためて復活しましたが。歴史的には、インド・
中央アジアの仏教徒は、スーフィズムすなわちイス
ラームの神秘主義に吸い寄せられて、イスラームに
改宗していったことは見落とせません。もちろんイ
ンドでは、ヒンドゥーイズムに融合していったとい
う側面もあるとしても。ヒンドゥー教がイスラーム
と接触したところで起きたヒンドゥー教改革の動き
としてのスィク教の成立を含め、またペルシャ語と
その文化の影響やムガル帝国下のイスラーム法秩序
への組み込みなどを含めて、インドのイスラーム化
の過程を、インド文明の形成・発展の中で積極的に
意味づけ直すことが大事なのです。インドといえば、
無条件にヒンドゥー教の世界だと規定してしまう自

称インド研究者が、ここでまた、イスラームをイン
ドにとっての外的要素として切り離し、切り捨てて
しまう手続きを踏む傾向があったことを、批判しな
ければならないのです。私達が一般に「インド的」
と識別する文明要素に、実は「イスラーム的」なも
のがあまりに多いのは、驚くばかりです。

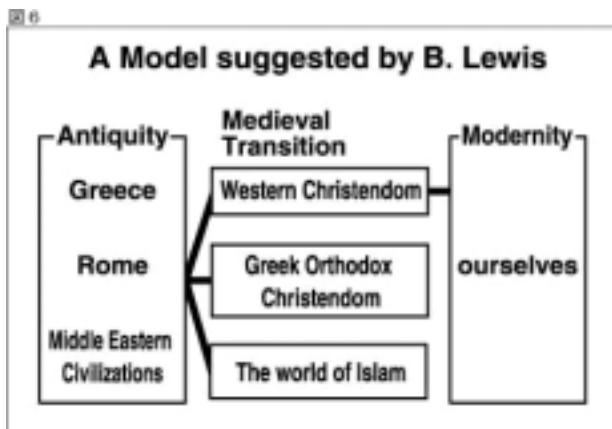
図 5-3



さて、つぎに日本ですが、さっきお話したように、
中国や朝鮮や琉球や東南アジアの社会がそれぞれイ
スラーム型ネットワークに参加することによっ
て生まれた、人間の都市化、思想の近代化の影響を
受けたのでした。西洋と遭遇しなければ人間は近代
的精神に触れたことにならない、などということは
ありません。織田信長という存在に着目してもいい
のですが、16 世紀日本の変化は、アジアのイスラーム
の近代化と切断して考えることはできない。そし
てさらに 16 世紀には、アンダルシアからキリスト
教が伝わってきた。日本は西洋とここで初めて出会
ったと理解されたりしています。ところが、そのア
ンダルシアは、つい半世紀前まではアラブ・イスラ
ーム世界の一部だったのです。ですから、日本に
伝わってきた南蛮・キリシタン文化が、そのまま西
欧の文化だなどと思ったら大間違いです。戦闘的正
統派信仰を掲げるカトリシズムのキリスト教が入っ
て来たのだとしても、当時の日本社会が受け取った
のは、イベリア半島におけるイスラーム文明の文物
と思想の根っこでもあったのです。ペルシャ湾・イ
ンド・東アフリカ・東南アジアのイスラーム化のあ
またの果実が、それに加わりました。

以上をまとめますと、ヨーロッパは地続きのイスラーム都市文明の圧倒的影響にいやおうなく直面した。だから、逆に凄じ抵抗も生まれた。そこから ambivalence（両面価値、矛盾した感情）という言葉があてはまる「好きだから嫌い」、「偉いと思うから馬鹿にする」、「恐怖のために攻撃的になる」といった心の葛藤、コンプレックスが、ヨーロッパ人の側に生じた。イスラームを敵視し、それに身構える心理は、ここから起こってきたのです。

ところが日本の場合は、イスラーム化が促進したアジアのネットワークと感応することによって、近代が始まった。16 世紀以降このプロセスはきわだった形で展開するのですが、徳川幕府が国際関係を厳しく管理したことも作用して、イスラーム文明とのかかわり方の認識は、ヨーロッパのそれと非常に違うものになりました。ここから、むしろ関係の間接性、疎遠さ、したがって無知の必然性を強調する心理的土台ができたのです。日本とイスラーム世界とのつながりを認めない、あるいは軽視する、という精神風土が、現在の私達をも縛っています。



バーナード・ルイスというイギリス人でアメリカのプリンストン大学にいるイスラーム学者が、『フォーリン・アフェアズ』誌の 1997 年 1 2 月号に「西欧と中東」という論文を発表しました。図 6 は彼の議論を図示すればこうなると私のほうで作成したものです。彼の議論では、古代は、ギリシャ・ローマといわゆる古代オリエント文明をまとめたもの。そこから中世の過渡期が出てきて、西欧キリスト教世界、

（東欧の）ギリシャ正教世界、そしてイスラーム世界が並列した。ところが、私達自身が生きているモダンの世界は、中世の西欧キリスト教世界にだけつながったものとして出現した。のちにソ連を生み出す正教世界や、ましてや今日の世界の混乱の元凶であるイスラーム世界は、もう歴史的使命を終えたのだ。過去においては立派だったかもしれないそれらも、私達自身のモダニティとその未来にはつながるものではないのだから、という議論です。実際、これまで日本の学校で教えてきたのは、まさしく、バーナード・ルイスがまとめてみせてくれたこの議論なのです。学校の先生は、「いや、そんなはずはない」と言われるかもしれませんが、実は、この考え方が私達の頭の中に刷り込まれていることを、私達は十分に自覚していないのであり、そのことが、ヨーロッパ中心主義やオリエンタリズムの落とし穴にはまり込んで世界を見誤っている私達の抱える問題の根源なのです。そこで、これに対して、私は、諸文明のかかわり方に焦点を合わせてイスラーム文明の意義を見直し、私達の新しい世界像を描き直したい、と思うのです。あらためて、図 3 と図 6 という二つの非常に対抗的な考え方を比べていただきたいと思います。

それでは、日本からイスラーム世界をどういう風に見直していくことができるだろうかということについて、駆け足でお話します。たとえば、イラン北部の、カスピ海に近い考古学的遺跡から掘り出されたカットグラスとまったく同じスタイルのものが正倉院御物の中にもあることをご存知の方もいらっしゃると思います。西暦 6 - 8 世紀は、日本国家の成立の時期ですが、この時代に、イランからこんなガラス器が日本に伝わってきていたのです。

「日本はイスラームと全然関係ないまま来た」とか、「欧米については分かるが、イスラームは盲点」などというセリフが、日本社会ではよく聞かれる。非常に悲しいことですけれども、日本では大知識人なのに、「私はイスラームのことは良く知りませんので」と言って、誠実かつ良心的に振る舞うふりをして、無知を自慢するみたいな人もいます。本当は

イスラームのことが分かなければ、西洋のことが分かるはずがないのです。だから、もし「私はイスラームのことを知りませんので」と言うのであれば、「私は、本当はヨーロッパのことも分かっていないのです」と告白しているようなものなのです。ところが、そんなことをおっしゃる先生方に限って、「自分は西洋文明について、第一人者だ」などと自信を持っておられるのかもしれませんが。

7 世紀・8 世紀に西アジアから日本に及んできた影響は、その痕跡を正倉院の宝物に見出すことができます。琵琶の螺鈿の装飾には、ナツメヤシがあったり、駱駝がいたりする。7・8 世紀に、こんな世界の情景が日本にもたらされていたのです。それどころか、飛鳥とか大和とか、日本国家のふるさとは、イラン人も住んでいたと見られます。人名等のペルシャ語の痕跡も研究されています。この頃は、世界史は既にイスラームの時代に入っていたのです。それなのに、「日本はイスラームと無縁であった」とか、「私達はイスラームのことなど知らなくて当然だ」とか、言い交わして、「イスラーム世界なんぞ遙かな砂漠の屋気楼みたいなもので、そんなエキゾチックな世界はこれからゆっくり勉強しましょう。テロ事件も起きたことだし。」などと独り言をいう人もいます。これが、日本の歴史認識の現実です。

13 世紀の初め、慶政上人という方が仏教の勉強をしに中国に留学しました。福建の泉州、アラビア語でザイトゥーンと呼ばれていたあの港町を訪れた慶政上人は、そこでイラン人の商人たちと出会います。お釈迦様の国から来た人たちだと思って、記念に一筆書いてくださいと頼む。イラン人たちはさらさらと書いてくれた。縦 33cm、横 50cm の紙に向きを替えて寄せ書きのように書かれています。さらに慶政上人もこれを記念に頂いた経緯を脇に書き込んでいる。これをもって日本に帰ってきて、お釈迦様ゆかりの地から来た人々が書いてくれた大事な「南蛮文字」の文書ということで、京都のお寺にずっと大事に保存されてきたのです。20 世紀初めになって、京都大学の先生でのちに総長にもなる羽田亨が調査して、これは経文ではなくペルシャ語の古典詩だということが判明しました。その後、東京外国語大学

のペルシャ文学の先生たちの研究によって、詩の出典など詳細が明らかにされました。

京都の祇園祭の山鉾は、ペルシャ絨緞で飾られている。太閤秀吉の陣羽織の生地はイラン産の鳥獣文、絹の綴れ織です。このように、間接的ではありますが、日本とイスラーム文化は、ずっと深いつながりがあったのです。17 世紀には、徳川幕府は長崎にモウル通詞（ペルシャ語通訳官）を配置しました。日本の「鎖国」を見直す一つ材料です。



お見せしているのは 1910 - 1911 年に刊行された『イスラミック・フラタニティー』（イスラームの友愛・同胞愛）という英語の月刊紙のある号の 1 頁です。上の部分に「東京、1911 年 5 月 15 日」と印刷されており、東京市赤坂区台町 40 番地のムハンマド・バラカトゥラーが発行者でした。彼は東京外国語学校の教授でしたが、インドの独立運動家としても有名な人物です。『イスラミック・フラタニティー』の目的が題字の下に書かれています。「イスラーム信者たちの間で、また他の姉妹諸宗教の信者たちとの間で、友愛・同胞愛の感情を増進する目的のために捧げられる機関誌」と。つまり、イスラーム教徒の同胞感情・団結心・連帯意識を強めるためだけの機関誌ではなく、イスラームと他の諸宗教の人たちみんなとの間の友愛・同胞愛の感情を強めようとするための機関誌だと主張しているのです。これが「都市」型「人類社会」の形成を志向するイスラーム教徒の考え方なのです。

私達は、つねづね、イスラーム教徒はイスラーム一本槍、コーラン一本槍で、他の宗教は撃滅してし

まえとでも言っているかのように、学校で習い、マスコミによって誘導されてきました。けれども、イスラーム教徒はユダヤ教の聖書も神の啓示の書として尊重しますし、キリスト教徒の旧・新約聖書もアッラーが人類に与えた啓示の書だと言って大事にします。10世紀ごろ北インドで仏教徒と出会ったイスラーム教徒は、「こういう宗教もあったのだ。この人たちは預言者ブーザー（仏陀）を通じて神の啓示を受け取った人たちなのだ」と言ったでしょう。どんな宗教に出会っても横並びに、全部一つなかりに、アッラーが制定した宗教につながる人々なのだという感情を持つ。私はイスラーム教徒ではありませんが、このことこそ、私達、日本人一般が、イスラームの立場について認識しなければいけない一番大事なポイントではないかと思います。

日本では、イスラームの神様はアッラーで、ユダヤ教やキリスト教の神様はヤハウェで、それぞれ神様が違うと思っている人が多いです。ところが、英語でゴッドが「神」を意味するように、アラビア語でアッラーとは「神」ですから、アラビア語で暮らす人々、つまりアラブの人々にとっては、宗教がユダヤ教であれ、キリスト教であれ、イスラームであれ、神様はアッラーなのです。アッラーは別にイスラーム教徒の神様ではない。ユダヤ教徒もキリスト教徒もイスラーム教徒も全部同じ神様を拝しているのです。このもっとも初歩的・基本的な事柄が、日本人には分かっていないのです。

最後に、日本とイスラーム文明とは、大変不思議な格好で、並行現象として存在してきたということをお話したいと思います。

聖徳太子と預言者ムハンマドは同時代人です。聖徳太子が亡くなったことになっている年は、イスラームの暦で非常に重要な意味を持つ紀元元年に当ります。ですからはなはだ微妙な形で、聖徳太子は預言者ムハンマドよりほんのわずか先の人ということです。でも、二人は重なり合った時代を生きた。イスラームのウンマ（国民国家）が確立し日本の国が確立した7世紀以降、世界史の中で、日本の歴史とイスラームの歴史とは全くの併行現象です。ところで、日

本は「単一民族」の国などと間違った観念が一人歩きしたりしていますが、実際は日本の社会・文化が、非常に多様な人々と多様な文化の協同によって築き上げられてきたものだということを、私達は振り返ってみる必要があるのです。そういう意味では、イスラームが異質なものをどんどんつなぎ合わせていくネットワークキングと都市化の機能を発揮してきたことを考え合わせると、イスラーム文明に備わった文明間対話の力と、日本の文明の真実の姿とは、どこかでうまく通じ合う潜在的可能性をもっているのではないかと、ということに思い至るのです。日本人が、ヨーロッパ中心主義の呪縛から身を振りほどくのと同時に、内向きで異質なものを排除する「単一の均質的日本人」という日本イデオロギーの観念を脱却して、日本社会を開いていくことこそが、人類の「都市」形成をめざすイスラームのグローバリズムと実りある対話を本格的に開始できる突破口となるのではないのでしょうか。

2025年の世界人口の推計では、イスラーム教徒は世界人口の1/3を占めることになることと云われています。2000年は1/5ですけれども、これから一挙にイスラーム教徒の比重が高まると予想されているのです。人類の3人に1人がイスラーム教徒という世界、それが目の前にある。私達の生き方とものの考え方の転換が迫られています。今日私の話の表題にさせていただいた「日本とイスラームの文明間対話」の意味合いが、いよいよ重大なものになると思います。

2002年3月に、日本政府とバハレーン政府が協力して「日本とイスラーム世界との文明間対話」をテーマとするシンポジウムをバハレーンで開催するという計画があります。9.11事件以降の世界で、このような企ての大事さが痛感されているのです。しかし、それは誰かに任せておけばいいということではなく、私達の身の回りで、私達自身が、文明の対話を開始し、広げていく、そういう具体的努力が必要なのだと思います。ありがとうございました。

【会場男性】

セリムさんに、質問が二つあります。一つめはイスラーム教について、もっともオーソドックスな勉強をするためには、何をしたら良いかということをお聞きしたい。二つめは私も含めた日本人の宗教観について感想をお聞きしたい。日本人は、宗教に対して節操がないという変ですけども、クリスマスを祝って、元旦には神道の神社に参って、葬式には仏教の儀式を行ったりする。それでいて「何を信じていますか」と問うと「無宗教です」という。イスラームの方々をはじめ、宗教に敬虔な方々は、無宗教という人に対してかなり奇異なイメージをもたれるということで、あちらのほうに行くときには一応ブディストと書いておきなさいと言われたこともあります。実際そのようなことについて、どのようにお感じになるでしょうか。



【セリム】

まずイスラームの方ですけども、極端なことを申し上げますと、基本的にはイスラームの教義において宗派というものはないことになっていると考えております。イスラームにはシーア派とスンニ派というものが存在するとよく言われています。そのシーア派とスンニ派というのは、教義に対する意見の相違から生じた宗派ではなくて、歴史の解釈に関す

る意見の違いによって生じた宗派ではないかと思えます。預言者が亡くなりまして、その後の統治者にどのような人間がふさわしいかという問題が生じました。シーア派は、預言者の跡継ぎたるものは、預言者の政治的な権限だけではなく、宗教的な権威も引き継ぐものであるのだと考え、できるだけ預言者の直系、家族の関係者がふさわしいのではないかという意見が多く出ました。それに対してスンニ派、後からスンニ派と呼ばれているグループは、預言者の宗教的な権威というのは彼のみには属しているものであって、神の使徒のみに伝達者としての資格が与えられた。預言者の後に統治者の地位につくものは、預言者の宗教的な権威まで継ぐものではないと。正義を以って政治・行政を扱うならばそれが立派な統治者ではないかと。つまり、預言者の直系でなくてもかまわないという意見を持った人々が、後からスンニ派と呼ばれました。この礼拝所においてはシーア派もスンニ派も肩を並べて礼拝をします。お祈りのしかたも大きく違ってはおりませんし、現世来世の考え方、宗教的な義務等は全て同じであると申し上げたいと思います。他にもいくつかグループがあろうかと思いますが、日本の政界から例をひきますと、イスラームに言われる宗派というのは、政界にある政党ではなく、自民党というのではなく、自民党の中に色んな派閥がありますよね、その派閥の中に経世会というのがありますが、イスラームで言われている宗派というのは経世会をなしている議員さんたちのようなものと思っています。

二番目の、無宗教という人がどのように写るかということですが、要するに、どのディシプリンの中にも入っていないアナキストのようなものです。宗教というのは、人に身分を与えると同時に、その人はその身分の中でどのように動くのかという、そのアイデアを相手に対して発信するわけです。あの人は仏教徒といいますが、仏教徒というのはこういう概念なので、ここからここまでの範囲で動く人なん

だと。こういう価値観を持っている人なんだと。安心感を与えるわけです。あるいはキリスト教徒といえばこういう考え方の人だからと安心できます。無宗教と言う人は、そういう意味で、どのディシプリンの中にも属していない、どのように動くか分からない。個人的な利害関係の中で動いていますので、一分一分、一秒一秒で変わる。個人がベースで、個人の経験で動いていますので、何をどのようにするか分からない。そういう風に写っているかもしれませんが。そのために、イスラーム世界にいらっしゃる時には「私には宗教はない」というよりは、その中身はどうあってもかまいませんが、何々を信仰しているものですという紹介の仕方が、相手にその意味は分からなくても、ある意味での安心感を与えるのではないかと思います。

【板垣】

イスラームについてオーソドックスな勉強をしたら良いかというご質問ですが、私は研究者の立場からお答えしたいと思います。今お話があったように、イスラーム教の宗派は、他の宗教の宗派とは非常に違うものです。まず数から言っても、圧倒的にスンニが多い。これもある、あれもある、というものではないのです。それから先ほどのお話のように、政治的なリーダーが誰であるべきかというところでの意見の対立からきたもので、教義上の違いではない。ですから、本当に小泉さんがいいのか、それとも橋本さんがそれに反対する勢力に担ぎ上げられるのか、そういう感じの次元の話と考えれば良いと思います。イスラーム共同体をまとめていく政治的なリーダーシップについての考え方の違いから発した、そのことが一番大事なポイントだということです。

それから無宗教の話ですが、初詣に神社に参ったり、クリスマスを祝ったりというの、宗教はあるわけですよ。そういう人が自分は無宗教だと思っている。これは、日本人は単一民族だという合言葉に乗せられ、あやつられて、そう思い込んでしまっているのと同じで、日本人には宗教がない、宗教とは無縁だという掛け声に踊らされているのではないで

しょうか。日頃は、宗教に無関心の積もりでも、なにかの時にはちゃんと「大学受験に受かりますように」とか言って、どこかでパンパン手を打って拝んだりしているわけですから。イスラーム世界の人々は、日本人の心の中には、何教と呼ぶかは別として、やはり生き方の原則なり拠り所があるに違いないと思って、日本人のことを見ているわけです。それなのに無宗教だと言えば、聞く側は当然混乱して、いったいこの人は何を考えて暮らしているのかと首をひねることになる。ですから私達自身が、自分自身にとって心の拠り所や生き方の原則とはいったい何なのか、それを世界中の誰にでも分かってもらえるように説明するにはどうしたらよいかということ、普段、しっかり考えていないところに問題があるのではないかと考えております。



【会場女性】

吉田と申します。大変意義深いお話で面白かったのですが、質問が二つあります。私はイスラーム教徒の友人がたくさんおりまして、なぜ仲がいいのか考えてみますと、なにか日本人と近いものがあるなと感じました。私が感心したのは、尊敬の気持ちをもって客をもてなしてくれるように思うのですが、先生はどのようにお考えでしょうか。また、私は来年の3月にパーレーンへ行く予定があるんですけども、今度開催される会議はどのようなものでしょうか。

【板垣】

有難うございました。

共通性をどう考えるかということですが、別にイスラーム教徒にだけものすごく親近感を感じるというのではない。世界中のいろいろなところに親しい友人がたくさんいますが、イスラーム教徒と限ったわけでもない。それからイスラーム教徒の中にも、ほんとうに腹が立って喧嘩する、後で思い出しても気分が悪い人だっていますので、あんまり一律にイスラーム教徒を一括して考えるのはどうかなという気持ちも持っております。

ただ、イスラームという宗教は、つつましさと思いやりといえますが、ある状況の中で自分の置かれている立場をわきまえて行動する関係性的な考え方をするように、人間を教育する。日本人は、普段、必ずしも神様を基準においているわけではないかもしれないが、イスラーム教徒の側から日本人を観察すると、概して、日本人は親切で思いやりがあり、自分たちと同様神仏への畏れをもって行動しているのではないかと、感じている。先方がこちらに特別の親近感をいっている、それでいっそう心が通い合うことになるのではないのでしょうか。

日本人が畳の上に正座する姿、お茶を頂いたり、花を生けたりする。それは単に、姿勢がイスラームの礼拝のときの姿勢と共通するところがあるというだけではなくて、日本人の心の土台に人生に対する姿勢なり態度というものがあって、それが現れ出ているのだらうと、彼らはそんな風に感じているのではないかと思います。

逆に、ある意味では日本の浪花節みたいな情景に、何度も出会ったことがあります。知り合いのカイロ大学学生のA君が、カイロ北方ナイル・デルタの農村に囲まれた地方都市にある自分の家にきてくれ、そのついでに20世紀のはじめエジプトの反英独立運動の発火点となる有名な事件が起きた近くの村にも案内したいと、しきりに誘ってくれたものでした。そこで、彼の学年末試験が終わった翌朝、彼を車に乗せて、その地方都市に向かいました。まず寄った彼の家は何か森閑とした雰囲気、エジプト人の家

としては何か変わった感じがしましたが、お父さんはじめ会った家族は皆歓迎してくれてご馳走すると言いきるのです。長い間待って、ご馳走がテーブル一杯に並び、家族親族が一杯集まってきて、食事になった。でもエジプト人特有の浮き浮きした陽気さがない。不思議な気がしながら、A君や親戚の人たちがさかんに座を取り持ってくれて食事は終わった。そこで、いよいよA君が問題の村に案内してくれるというので、家族親族に礼を述べて辞去しようとしていたら、支度をしにいったA君が滯沓として涙を流しながら戻ってきて「申し訳ないけれども、ご案内できない」というのです。なんと、前日にA君のお母様が容態が急変して亡くなったというではありませんか。大学で試験中の息子には、自分の病気のこと知らせないようにと言っているうちに亡くなってしまった。帰宅した息子は客を連れてきた。悲しみの中にありながら家族も親族も、何も知らぬA君には母親が外出でもしているような言いつくろいをして、客人を盛大にもてなしてくれたのです。一番下の妹がとうとう耐えきれずにA君にうち明けてしまった。私は、A君にも家族の皆さんにも、いべき言葉を失いました。これは謡曲「鉢の木」の世界だと思いました。

それから、パハレーンの会議は、中東のアラブ諸国とイラン、それぞれの国々から二人ずつ代表的な知識人に来てもらって、知識人ネットワークをこれからいかに作っていくかという話をします。どこかの局面でお手伝いいただけるなら、それはありがたいのですけれども、会議の性質上、出席して発言していただいたりできないのが残念です。

【会場男性】

一橋大学の範と申します。先生のお話を聞きますと、イスラーム文化・文明ならびにイスラーム教が素晴らしいということが良く分かりました。私たちのイスラームに対する固定観念はかなりゆがんだ部分があると思います。しかし、急速に経済が発展してきた近代経済史から見ますと、もしイスラーム教が素晴らしいとすれば、なぜイスラーム教は近代化に遅れたかということを知りたいです。本質的に経

済の発展は宗教と関係があるのでしょうか。あるとすればどういうことでしょうか。

【板垣】

ご質問ありがとうございました。実は、私が話をしますと、必ずそういう質問が出るんです。それに答えるためOHPシートも用意してあるのですが、時間もないのでこれはあきらめ、縮めた形でお答えします。結論を言えば、宗教のために発展が遅れたとは言えません。そうではなくて、さきほどお話ししたように、西欧と日本が世界史的には異常な例外的な社会発展のパターンを持っていた。その他の圧倒的に広い世界では見られないような展開で、いわゆる産業主義とミリタリズムとが結びついていただけです。そういう武力的な産業主義が近々200年ぐらいの間に、独特の世界的ヘゲモニーを打ち立てたということだと思います。

ですから、もともとヨーロッパが発展していたのではなく、18世紀くらいから力の逆転が起ってきた。例えばイスタンブールでも、カイロでも、バグダードでも、ダマスカスでも、アレppoでも、イスファハーンでも、サマルカンドでも、フェズでも、マラーケシュでも、バザールとかスークとかへ行くと、奥の仕事場ではトンカチトンカチ作業している。手前の、道路に面した場所が、店になっていて物を売っている。買い手との商いの交渉を通じて、こういうもの、ああいうものと言う客の好みを調べながら、奥で物を作っている。別に注文生産ではないが、対面する人的関係の中で、生産活動がおこなわれている。決して画一的な大量生産ではない。取引も、価格を固定させず、バーゲニングのなかで、必要に基づいて、人と人との関係の中で、物の値打ちが決まっていって、それが商業だという考え方です。

他方では、みんな画一的な大量生産で値段もひとつ。このシステムが、武力で原料を押さえ、マーケットを支配する。このような軍事化した産業主義は、人的関係の中での個別性・差異性の情報のやり取りとしての経済活動とは、全く異質なものです。実はある種のがん細胞みたいな産業主義、これが社会科学においてもっばら資本主義経済として議論されて

きたものではないでしょうか。しかも現代資本主義は、いまやバーチャルなマネー資本主義になってしまった。ですから私達は「資本主義」概念の意味合いをもっと厳密に、かつもっと広げて考え直して見る必要があるでしょう。

イスラーム経済論の一番根本に、「かね」に「かね」を生ませてはいけないという利子の禁止、不労所得禁止の思想があります。そこでは、パートナーシップと損益分担、情報化人間の自己責任が強調されるのです。いろいろ違う原理が働いている経済の多様な局面を見直す必要があると思います。



日本の軍事化された産業主義があらわれたのは、19世紀なかばから後の100年ですが、16世紀あたりから日本は西欧とすでに繋がり合っていたのです。イギリスのジェフリー・パーカーという軍事史の先生が書いた『ミリタリー・レボリューション』という本が1970年代に出版されましたが、日本では80年代初めに翻訳ができました。その日本語訳の題は『長篠合戦の世界史』(同文館発行)という表題になっています。いかに効率よく人を殺すかを徹底的に追求した軍事革命の成果に、まず銃があります。それをポルトガル人から手に入れたと、日本ではまたたく間に自前で生産するようになる。織田信長は戦闘に小銃の速射戦法を採用した。イギリス人の著者はヨーロッパ軍事革命の最初の実験の巨大な成功例が長篠の合戦だったと論じているのです。

西洋はつねに先進的と見られています。念のために申しませんが、ギリシャ・ローマ「古典文明」とい

うのは 19 世紀のヨーロッパ人が自分達の元祖のように仕立て上げたものです。古代ギリシャ・ローマが西洋の起源みたいな話は、全くどうしようもない歴史の偽造です。アメリカのマーティン・バーナルという先生が、古代ギリシャ文明がアジア・アフリカの起源だということを証明する『黒いアテナ』という本を書いています。古代ギリシャ文明はオリエント文明の一環をなしていた。古代ギリシャ・ローマの文明は、素直に考えてみても、アルプスの向こうでヨーロッパが成立するより前に、自然にイスラーム世界に受け継がれたのです。古代ギリシャ・ローマ世界の本拠は今どうなっているかといえば、トルコであったりシリアであったり。ギリシャやイタリア半島は、リビアと地中海をはさんで向かい合いです。古代ギリシャ・ローマのイメージが、19 世紀以来、西欧の自己中心的で偏狭な見方のために、すっかり歪んだアーリア・モデルにすり替えられてしまったのです。



確かに、今、東アジアで新しい経済・社会発展が起こってきている。しかし、その根っこをよくよく考えてみると、必ずしも儒教とか漢字文化圏ということではなく、イスラームが最初に機動力を発揮して、10 世紀あたりから東アジアでも展開してきたネットワークキングの伝統が巨大な資産として働いているのではないのでしょうか。ですから、そういう新しいアジアの経済・社会発展というものを考えていく上でも、イスラームのアーバニズムの見直しが大事だと思っています。

【セリム】

一つだけお話ししたいことがあります。資本主義の説明の中で、西洋的な経済は、人間の定義について、人間というものは自己利益を追求して動くものである、自己利益のために動く動物である、という文章があると思います。イスラームの場合、人間を定義するときに、人間というものは精神から成り立っており、精神は良心と欲から成り立っているものである。人間は良心をできるだけ増やしながら、欲というものを軽減し、制限する、そのために教育をするというように、人間の定義をしております。要するに、イスラームの場合、人間は、自己利益のために動く動物ではありません。相手の利益があるならば、自分の利益よりも相手の利益を優先する。相手の利益を優先しているからこそ、神はその人に対して恩寵というものを与えるのだと。

もう一つ、先生が今おっしゃられたように、産業発展というものは、果たしてどこの国でも人間の発展といえるかどうかという問題があるのではないかと思います。要するに、環境汚染とか、オゾン層がどんどん減っていく問題にしても、実は産業発展といわれていても、地球の命を短くしているのではないかという逆の評価も成り立つと思います。ある時点まで発展しますと、今高く評価されております産業発展の歴史過程というものは、その時点から、実は世界の破滅の歴史であるかのように書かれかねない心配する要素もあります。要するに、物の生産や消費を重視して、人間はただただそのサークルの道具に過ぎないという考え方は、果たして発展といえるのかという疑問を投げかけたいと思います。

【司会】

いろいろとご質問があるかと思いますが、後は懇親会でお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

講師略歴

板垣雄三（いたがき・ゆうぞう）

1931年東京生まれ。1953年東京大学文学部西洋史学科卒業。東京大学東洋文化研究所助手、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授、東京大学教養学部教授、東洋文化研究所教授など、歴任。その間、大学院教育では国際関係論、イスラーム学、地域文化研究などを担当。在外研究ではエジプトのアインシャムス大学中東研究センター客員教授など。2001年春、東京経済大学コミュニケーション学部教授を定年退職。東京大学および東京経済大学名誉教授。日本学術会議会員、第1部長。専門は、中東・イスラーム研究、比較地域研究。

Selim Yucel Gulenc（セリム・ユジェル・ギュレチ）

1965年トルコ・トカット生まれ。1984年イスタンブール、マルマラ大学経済行政学部行政学科卒業。イスタンブール大学大学院政治学部EC統合関係学科。1990年日本政府文部省奨学金を受け来日。1993年島根大学大学院法学研究科修士。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程。1996年度渥美奨学生。1997年在日トルコ大使館勤務。2000年東京ジャーミイ副代表。



SGRAレポート No.0010

第6回 SGRA フォーラム

「日本とイスラーム：文明間の対話のために」

編集・発行 関口グローバル研究会(SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口 3-5-8 (財)渥美国際交流奨学財団内

Tel : 03-3943-7612 Fax : 03-3943-1512

SGRA ホームページ : <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール : office@aisf.or.jp

発行日 : 2002 年 6 月 15 日

発行責任者 : 今西淳子

印刷 : 藤印刷

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。

